

## Development of the Scale of a Personal Tendency with Resignation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 道弘, 小島, 弥生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1263">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1263</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 諦観傾向尺度作成の試み

## Development of the Scale of a Personal Tendency with Resignation

田中道弘・小島弥生

TANAKA, Michihiro KOJIMA, Yayoi

本研究の目的は、諦観傾向尺度作成のため、諦観傾向に関する項目を作成し、その妥当性及び信頼性を確認することであった。研究1では、大学生101名を対象とし、諦観傾向項目について主成分分析を行った。その結果、15項目中、主成分負荷量の低かった3項目を除いた12項目で再分析を行い、すべての項目が.40以上にまとまった。また、信頼性係数は $\alpha = .89$ となり、非常に高い信頼性を得た。研究2では大学生158名を対象に諦観傾向項目12項目について主成分分析を行った結果、 $\alpha = .89$ と高い信頼性を得た。諦観傾向尺度の構成概念妥当性について検討したところ、家族機能（家族との一体感の強さ）との間に弱い負の相関が、恋愛への態度のうち大切・必要の因子との間に弱い負の相関がそれぞれみられ、恋愛への態度のうち利他的付加的価値との間に弱い正の相関がみられた。諦観傾向が強い者ほど、家族との関係や特定の異性との関係にネガティブな思いを抱いていることが確認できた。これらの結果から、本尺度の信頼性、妥当性の一部が確認された。

2015年6月17日に公職選挙法が改定され、2016年6月19日に施行された。この公職選挙法改定に伴い、選挙権年齢は「満20歳以上」から「満18歳以上」に引き下げられた。そして同年7月の第24回参議院議員通常選挙から、国政選挙としては初めて「18歳選挙権」が適用された。国政選挙の年代別投票率に関する総務省の発表（総務省、2018）によれば、第24回参院選では、全年代を通じた投票率が54.70%のところ、年代別では10歳代が46.78%、20歳代が35.60%、30歳代が44.24%と低く、また、第48回衆議院議員総選挙（2017

年10月）でも同様に、10歳代が40.49%、20歳代が33.85%、30歳代が44.75%となっている（全年代を通じた投票率は53.68%）。つまり、若年層全体としては、投票率はいずれの選挙でも他の年代と比べて、低い水準にとどまっていることが指摘されている（田中、2017）。

なぜ10～20歳代の若者層は投票に行かないのだろうか。わが国では学校教育などによる主権者教育が十分に浸透していないことや、この世代の多くの者が未熟で政局などを見通すだけの力が無いこと、政治について無関心

キーワード：諦観傾向、尺度構成、信頼性、妥当性

Key words : a personal tendency with resignation, scale development, reliability, validity

でいられるほどわが国が平和で政治経済が安定していることなど、原因はいくつか考えられる。

これらの問題が存在することを前提とした上で、本研究では若年層の低い投票率に関する1つ目の仮説として「諦め」という現象を考えたい。「諦める」とは、広辞苑（第7版）によると「思い切る」、「仕方がないと断念したり、悪い状態を受け入れたりする」と説明されている。例えば、わが国では2007年には65歳以上の人口の割合が全人口の21%を占める超高齢化社会に突入しており（総務省統計局、2009）、相対的に人口比率の低い10～20歳代の若者層は政治家が考慮するのは高齢者に向けた手厚い政策が中心で、自分たち若者世代に寄り添ったものにならないと考えている可能性がある。つまり、自分が選挙時に投票に行ったとしても現状が自分たちにとって良い方向に変わることは何一つないと「諦め」ている可能性がある。

若年層の低い投票率に関するもう一つの仮説として、現代の若者の性質とされる「悟り」が影響していることが考えられる。藤川（2014）は1980年代半ば以降に生まれ、2002年度から2010年度くらいのいわゆる「ゆとり教育」を受けて育ち、経済活動や恋愛に淡泊とされる世代のことを「さとり世代」と総評し「ゆとり教育」と「悟り」からこうした呼称が使われるようになった”（藤川、2014、p.2）と説明している。「悟り」とは広辞苑（第7版）によると“①理解すること。知ること。また、気づくこと。感づくこと。察知。②〔仏〕まよいが解けて真理を会得すること”と説明されている。

先述したように「諦め」には「思い切る」「仕方がないと断念したり、悪い状態を受け入れ

たりする」等の意味があり、他方で、「悟り」には「理解する」「気づく」といった側面がある。若年層の低い投票率の背景には「現状を自分にとって良い状態に変えることが難しいことを理解し、現状を仕方がないと受け入れ、思い切る」心理傾向があると本研究では仮定する。なお、本研究ではこの仮定を検討する前に、以下の2点について整理したい。第一に、藤川（2014）のような世代論ではなく、心理傾向をパーソナリティの問題として検討することについてである。第二に、「諦め」に関する心理学の先行研究と本研究で新たに尺度を作成して検討しようとしている「観親傾向」との質的な違いについてである。

まず、藤川（2014）は2008年以降に生まれた、ゆとり教育を受けた世代を「さとり世代」と称し、この世代が他の世代と比べて経済活動や恋愛行動に淡泊であると指摘しているが、「諦め」や「悟り」の現象を世代論で語ることが本当に妥当だろうか。投票行動を例にすると、低い投票率とはいえ、10代や20代の若者のうち、投票に行く人も一定数は存在している。中には義務的に投票に行くだけの人もいるかもしれないが、同時に、積極的に現状を憂いたり、あるいは現状を肯定したりする意思表示として投票に行く人もいるだろう。若年層が全体的に他の世代と比べて「諦め」やすく「悟り」の気持ちをもっていると断定することはできない。そうではなく、他の世代も含めて「諦め」や「悟り」の気持ちを感じやすい人もいれば、感じにくい人もいると考える方が妥当ではないだろうか。つまり、「諦め」や「悟り」は個人間で違いのあるパーソナリティ傾向としてとらえることができるのではないかと。

次に、「諦め」に関する心理学的な検討を

行っている例として、浅野・小玉（2007；2008）や菅沼（2013）が挙げられる。浅野・小玉は「わりきり志向」という語で「諦め」を表現し、「個人が葛藤状態にある際に目標レベルでの諦め（諦めようという意図や動機）を有する個人傾向」と操作的な定義を行っている。菅沼は、「自らの目標の達成もしくは望みの実現が困難であるとの認識をきっかけとし、その目標や望みを放棄すること」と定義している。ともに「目標」という語を用いているが、表している事柄はかなり異なる。浅野・小玉では「諦めようとする事」自体が葛藤状態での目標であるという捉え方で、その目標の持ちやすさ・持ちにくさに個人差があるという考え方である。菅沼では諦めることとはその個人がもつ何らかの目標を放棄することであり、目標は対象物である。これらの先行研究で検討している「諦め」と本研究で検討を試みるパーソナリティ傾向とは、質的に異なっている。そこで本研究では「諦観傾向」という語で、測定したいパーソナリティ傾向を表現することとする。

諦観は、広辞苑（第7版）によると仏教用語では“たいかん”、日常用語では“ていかん”と読み、後者の意味として“あきらめること”、“入念に見ること”がある。よって「諦観」には「諦め」と「悟り」の双方の意味が内包されていると理解することができる。また、吉井（2009）によると諦観の語は、近世以降「あきらむ」「観念する」「覚悟する」など、ある重大なことを知るといふ意味の語が内包されているため、諦観という表現にはマイナスを受け入れることにより、いわば「先制攻撃」の態勢に入る筋道もあることが示されている点が興味深いと指摘している。つまり、諦観にはその人が覚悟をもって（ある意味で

は積極的に）自分にとって悪い状態をあえて受け入れるという意味が含まれている。しかし、日常用語としての「諦観」という表現では「諦め」とほぼ同義としてみなされてしまうだろう。そこで本研究では「悟り」と「諦め」の両方の意味を表現する観点で「諦観」および「諦観傾向」という語を用いることとする。その定義は“その人の精神内部にのみ生じる個人的な感情、解釈、偏見に基づき事態を察し、諦めること”である。特に「諦観傾向」の場合は、「表面的には悟っているようで、実は諦めきれていない心性」をも含む意味として捉えたい。さらには、本研究で作成する諦観傾向尺度の合計得点を操作的に諦観傾向とする。

以上の議論をふまえ、本研究では研究1で諦観傾向尺度の作成を試み、研究2では複数の尺度との相関関係を検討することで尺度の妥当性を検討する。

## 研究1

### 目的

諦観傾向尺度作成のため、諦観傾向に関する項目を作成し、その妥当性及び信頼性を確認することを目的とする<sup>1)</sup>。

諦観傾向尺度の基準関連妥当性の検証として、速水・木野・高木（2004）の仮想的有能感との相関関係を検討する。近年、日本の若者は自尊感情が低いことがしばしば指摘されており（内閣府、2014；Schmitt & Allik、2005）、その背景には少子高齢化や情報化社会があるとされている。そして、相対的に少数派に属し、多様な情報にさらされる社会の中で自己評価を保つ方略として他者を自己より相対的に下げることから、現代の若者の特徴として他者軽視が指摘されている。他者軽

視に基づいた自己意識の1つに、仮想的有能感がある。仮想的有能感とは、“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”（速水ら、2004、p.1）である。

諦観傾向の定義は先述したとおり“その人の精神内部にのみ生じる個人的な感情、解釈、偏見に基づき事態を察し、諦めること”である。特に解釈や偏見の形成にあたっては周囲の人たちとの関係性をどのように捉えているかが問題となる。もし、諦観傾向尺度の測定している内容が他者の能力の批判的評価や、あるいは他者を軽視するような意識に基づくものなのであれば、諦観傾向と仮想的有能感との間の相関は強くなることが予測される。しかし、諦観傾向尺度が周囲の人たちとの関係性に基づいて、自らが何かを察して諦める傾向を測定する尺度であれば、両者の相関は相対的に弱くなることが予想される。なお、本研究では、諦観傾向の因子構造を明らかにすることが目的ではなく、諦観傾向という概念のまとまりを明らかにするために、主成分分析を用いて分析することとする。

## 方法

**調査時期・手続き・調査対象** 「選挙後の大学生の選挙に関する意識調査」と題した質問紙を作成し、2017年11月中旬に質問紙調査を実施した。調査者は埼玉学園大学で「社会調査実習Ⅰ」、「社会調査論実習Ⅱ」を履修している学生2名であった。データの収集は縁故法を含む有意抽出法により調査を実施した。調査実施時には、倫理的観点から調査は無記名で実施すること、及び本調査は強制されるものではなく、参加者の能力を測るものでは

ないこと、データの管理を徹底することなどを質問紙に明記した上で、口頭教示を行った。

調査参加者は、埼玉県内の大学に通う大学生106名で、このうち回答に不備のあった5名を除いた101名（平均年齢は19.4歳、 $SD=1.0$ ）を対象とした（質問紙は人数分の106部を配布し、回収率は100%であった。このうち有効回答数は回答に不備のあった5票を除いた101部で有効回答率は95.3%であった）。調査協力者の内訳は、男性55名（平均年齢19.4歳、 $SD=1.1$ ）、女性46名（平均年齢19.4歳、 $SD=0.9$ ）であった。また、わが国の選挙権の有無を尋ね、96.0%が日本国籍有り、4.0%が未記入であった。

**質問紙の内容** 質問紙には、速水ら（2004）の仮想的有能感尺度の11項目と、独自に作成した諦観傾向に関する15項目が含まれていた。それぞれ「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの4件法で回答を求めた。また、同じ質問紙には選挙や政治に関する質問項目が20項目組み込まれていたが、本研究では分析対象外とした。

諦観傾向に関する質問項目の作成については、調査者の学生2名に諦観傾向の定義を作成させた後<sup>2)</sup>、その定義に合致する項目案を15項目ずつ提出させ、学生たちと授業担当教員である第1著者との協議の結果、最終的に15項目を仮項目として用意した。なお、項目の作成にあたっては可能な限り教員側から口出しをせず学生に考えさせた<sup>3)</sup>。

## 結果

作成した諦観傾向尺度の因子的妥当性を確認するため主成分分析を行った。その結果、項目6、12、15の3項目が主成分負荷量.40

以下と低い値となった (Table 1)。そのためこの3項目を諦観傾向尺目から削除し、再度、主成分分析を行った。その結果、第1主成分にすべての因子が.40以上にまとまった。なお、上述した3項目削除前の15項目での第1主成分への寄与率は37.7%であったが、3項目削除後の12項目では第1主成分への寄与率は45.4%となった。諦観傾向尺度の信頼性を確認するために、信頼性分析を行った結果、 $\alpha = .89$ となり非常に高い信頼性が得られた。

次に、仮想的有能感尺度に因子的妥当性を確認するために主成分分析を行った。その結果、因子負荷量の値が低い項目が確認されたが、測定する上で必要な項目だと考えられたために項目を削除せず、すべての質問項目を分析の対象とした。これらの尺度の信頼性を確認するために、信頼性分析を行った結果、 $\alpha = .85$ となり非常に高い信頼性が得られた。仮想的有能感尺度の主成分分析結果をTable 2に示した。

諦観傾向と仮想的有能感については、 $r = .29$ という弱い正の相関が確認された。

### 考察

諦観傾向尺度については、すべての項目が.40以上でまとまり、12項目という項目数ながら信頼性の指標である  $\alpha$  係数も.85という高い結果を得た。第1主成分への寄与率は、当初37.7%であったが、主成分負荷量の低い3項目を削除後、45.4%と7.7%高くなった。

諦観傾向尺度と仮想的有能感については、 $r = .29$ という弱い正の相関が確認された。諦観傾向尺度の中にも、仮想的有能感に関する項目の中にも、それぞれ他者との関係性を含む項目が含まれているが、同じような内容を尋ねているとすれば、両者の相関は高くなってしまふことが仮定される。しかしながら、両者の相関係数が正の弱い相関を示したため、研究目的時の仮説が支持されたものと考えている。しかしながら、この結果は1回目の調査であり、また調査対象者が変わった場合、異なる結果が出てしまえば、諦観傾向尺度の信頼性に問題があることとなる。そこで次の研究でも同様の主成分構造が確認されるかどうか、検討することとした。

Table 1 諦観傾向尺度 主成分分析結果

項目	成分
11. 周りは自分を必要としていないだろう。	.81
8. どうせ、私の考えに賛同してくれる人はいないだろう。	.79
5. きっと私は他者に受け入れられないだろう。	.77
3. どうせ、私の考えは理解できないだろう。	.75
7. 私が傷付かないためには、人と距離を置くしかないだろう。	.75
13. どうせ、頑張ったところで意味が無い。	.62
10. 人に期待すること自体、無駄なことだ。	.62
9. そもそも、私は周りに期待していない。	.60
2. 私一人の意見では、物事は何も変わらないだろう。	.59
1. 私は、物事に対して悲観的である。	.56
14. どうせ、達成感を感じることはないだろう。	.55
4. 私が社会に従ったとしても、何も変わらないだろう。	.55
6. 私は、人と一緒に行動が出来ないだろう。	.35
12. 結果はどうあれ、何事も挑戦したほうが良いだろう。	.31
15. 私は、粘り強い方だ。	.23

Table 2 仮想的有能感尺度 主成分分析結果

項目	成分
4. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い。	.77
7. 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い。	.76
3. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い。	.75
2. 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる。	.75
1. 自分の周りには気のきかない人が多い。	.66
5. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる。	.66
8. 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる。	.65
11. 世の中には常識のない人が多すぎる。	.64
9. 今の日本を動かしている人の多くは、大した人間ではない。	.63
6. 自分の変わりに大切な役目を任せられるような有能な人は、私の周りに少ない。	.49
10. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少ない。	.14

## 研究2

### 目的

本研究の目的は、研究1で作成した諦観傾向尺度を再分析し、主成分分析の比較、及び信頼性を確認することである<sup>4)</sup>。

尺度の構成概念妥当性を検討するために、本研究では調査参加者の家族との一体感や恋愛に対する態度、また、日常生活に関する不安感をとりあげる。まず、諦観傾向が強いと、他者との人間関係に期待をもてないことが予想される。自分の家族との間にも結びつきを感じられず、特定の異性との間で親密な関係を築くことを諦めている可能性があるだろう。つまり、諦観傾向の強い人ほど、家族との一体感が相対的に低く、恋愛を重視せず、また、恋愛について冷めて享樂的な意識を抱く可能性が考えられる。さらに諦観傾向が仏教用語での「悟って諦めている」と同様の意味であれば、自分の生活について不安視などする必要はないものと考えられる。しかし、精神的にも未熟な青年の諦観傾向には「表面的には悟っているようで、実は諦めきれていない心性」も含まれている可能性がある。そのため、諦観傾向と生活不安の間には弱い関連がみら

れるだろう。

以上の予測について、研究2では検討する。

### 方法

**調査時期と調査対象** 調査時期は2018年10月であった。調査参加者は東京都内の私立大学に通う大学生で、心理学の授業を履修している学生たちであった。調査の実施は授業担当者に依頼した。そして、調査に協力しないことによって授業で不利益が生じることはないことを口頭で説明し、調査参加者の理解を求めた。

質問紙は「大学生の日常生活に関する意識調査」という名目で調査参加者に提示した。また実施の際には、調査は無記名で行い、本調査は強制されるものではなく、調査参加者の能力を測るものではないことを質問紙に明記した上で、口頭でも同じ教示を行った。

実施時に177部の質問紙を配布し、168部が回収された。回収率は94.9%であった。回答に不備のあった5部と留学生であった5名を除いた158部で分析を行った。有効回答率は89.3%であった。

分析対象者の学年は1年生から3年生で、男性69名、女性84名、その他5名の計158名

であった。平均年齢は19.0歳 ( $SD=0.87$ ) であった。

**質問紙の構成** 質問紙はフェイスシート(学年・性別・年齢・出身地)、家族機能尺度、恋愛イメージ尺度、経済活動に関する項目、生活不安尺度、諦観傾向尺度の質問0～5の全6パートで構成した。このうち、本研究では家族機能尺度、恋愛イメージ尺度、生活不安尺度および諦観傾向尺度の箇所を使用することとした。

①**家族機能尺度** 児玉(2016)の邦訳版家族機能測定尺度(FACESⅢ)の「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」のなかの凝集性因子である10項目を使用した。本研究では凝集性因子を「家族機能」と示した。凝集性は「家族成員間の情緒的絆」と定義されている。家族機能尺度は主に、情緒的な結びつき、家族成員間におけるお互いの関与の程度、時間、空間、意思決定、友人、趣味、余暇活動、といった下位項目によって構成されている。

本研究ではこの凝集性因子を用いて、家族関係に関する項目として使用した。凝集性因子(以下家族機能)10項目について、「1.全くない」～「5.いつもある」の5件法で測定した。得点が高いほど、凝集性が高いことを表している。

②**恋愛イメージ尺度** 金政(2002)の恋愛イメージ尺度の「刹那的・付加価値」の6項目と「大切・必要」の6項目を、本研究では恋愛行動に関する項目として使用した。

本研究では刹那的・付加価値を「刹那的付加価値」と示した。また、大切・必要を「大切・必要」と示した。刹那的付加価値は得点が高いほど恋愛に対して刹那的な感覚を抱いているということを表している。また、大切・必要は得点が高いほど、恋愛に対して大切で

あり必要であるという感覚であることを表している。これら12項目について、「1.あてはまらない」～「5.あてはまる」の5件法で測定した。

③**生活不安尺度** 藤井(1998)の大学生生活不安尺度の日常生活不安因子である14項目を用いて、本研究では大学生の生活不安に関する項目として使用した。本研究では日常生活不安尺度を「大学生生活不安」と示した。大学生生活不安の全14項目について、「はい」「いいえ」の2件法で測定した。採点時に「はい」を2点、「いいえ」を1点とし、得点が高いほど生活不安が高いことを表している。

## 結果

まず、諦観傾向尺度について主成分分析を行った。研究1と同様に、抽出成分を1因子に固定し、主成分分析を求めた結果、すべての項目が.34以上でまとまった(**Table 3**)。信頼性係数を求めた結果  $\alpha = .89$  となり、1回目の調査に続き強い正の相関が確認された。なお、第1主成分への寄与率は46.31%であった。

次に、各尺度の信頼性係数を確認した。家族機能尺度(「コミュニケーション」の中の凝集性因子である10項目を「家族機能」として使用)、恋愛イメージ尺度(刹那的付加価値、大切・必要の下位尺度ごとに使用)、生活不安尺度(日常生活不安因子である14項目を「大学生生活不安」として使用)、諦観傾向尺度の5変数について、記述統計量および信頼性係数を算出した(**Table 4**)。その結果、概ね高い信頼性係数を得た。

次に、諦観傾向と各尺度との相関は**Table 5**に示された通りであった。諦観傾向と家族機能、及び大切・必要との相関は、弱い負の相



Table 3 諦観傾向尺度 主成分分析結果

項目	成分
9. そもそも、私は周りに期待していない。	.70
10. 人に期待すること自体、無駄なことだ。	.70
7. 私が傷付かないためには、人と距離を置くしかないだろう。	.68
11. 周りは自分を必要としていないだろう。	.68
5. きっと私は他者に受け入れられないだろう。	.59
8. どうせ、私の考えに賛同してくれる人はいないだろう。	.57
1. 私は、物事に対して悲観的である。	.51
3. どうせ、私の考えは理解できないだろう。	.49
2. 私一人の意見では、物事は何も変わらないだろう。	.46
13. どうせ、頑張ったところで意味が無い。	.39
4. 私が社会に従ったとしても、何も変わらないだろう。	.38
14. どうせ、達成感を感じることはないだろう。	.34

Table 4 項目及び尺度毎の記述統計量と信頼性係数

	最小値	最大値	平均	標準偏差	信頼性係数
諦観傾向	12	48	25.27	6.55	.89
家族機能	6	11	30.74	9.18	.93
利他的付加的価値	6	6	14.08	5.93	.92
大切・必要	6	6	20.47	20.47	.84
大学生活不安	14	28	20.94	3.22	.76

Table 5 諦観傾向と各尺度との相関関係

	家族機能	利他的付加的価値	大切・必要	大学生活不安
諦観傾向	-.31	.30	-.22	.33

関がみられ、利他的付加的価値については、弱い正の相関がみられた。

大学生活不安については諦観傾向との関係で弱い正の相関が確認された。これらの結果は、研究の目的で想定した通りの結果となった。

### 考察

諦観傾向尺度の主成分分析結果は、研究1と同じような傾向を示し、12項目が第1主成分に含まれるものと考えることができた。さらに信頼性も  $\alpha = .89$  と研究1と同様に高い数値を示した。また主成分分析による寄与率も46.31%と12項目というわずかな項目数から考えると、十分な高さが得られていること

が指摘できる。

次に、他の尺度との相関関係からみる諦観傾向尺度の構成概念妥当性について考察する。予測通り、諦観傾向との間の相関関係は、家族機能（家族との一体感の強さ）との間に弱い負の相関が、恋愛への態度では大切・必要の因子との間に弱い負の相関がそれぞれみられ、また、恋愛への態度のうち利他的付加的価値との間に弱い正の相関がみられた。諦観傾向が強い者ほど、家族との関係や特定の異性との関係にネガティブな思いを抱いていることが確認できた。

また、諦観傾向が強いと人間関係について肯定的には評価できないことに加え、自分自身についても諦めていることが、大学生活不

安との間の弱い正の相関の存在によって確認できた。諦観傾向が本当に「悟って諦めている」のであれば、自身の生活について不安視はしなくなるはずである。精神的にも未熟な青年の場合の諦観傾向は「表面的には悟っているようで、実は諦めきれていない心性」が含まれている可能性があり、このような心性が諦観傾向と大学生活不安との相関との間に弱い正相関として表出したものと思われる。仏教用語でいう「悟り」の境地と、本研究で捉えようと試みた「諦観傾向」とは性質が異なる点が、諦観傾向と大学生活不安との弱い正相関によって示されたといえよう。

これらの相関の結果により、本研究で作成した諦観傾向尺度の構成概念が確認できたと考えられる。

### 総合考察

研究1、及び研究2を通じて、諦観傾向尺度は第1主成分にまとめ、信頼性も高いことが、この一連の研究から明らかにされた。また、構成概念妥当性については、いずれの尺度とも弱い相関を示し、独自性の強い尺度であることも確認された。これらのことから、今後の実用性にも耐えうる尺度であることが指摘できる。その一方で、諦観傾向は、自己愛の高さが影響していることや、友人関係でもその関係性によって変化を示すことなども予想できる。このような課題が残されているが、本尺度は、若者がなぜ選挙時に投票に行かないのかといった問題と共に、現代青年の心性を解き明かす一つの鍵になる可能性もある。

さらには、さまざまな世代の諦観傾向の程度を測定し、若者だけではなく他の世代に諦観傾向の概念が適用可能なことも検討する必

要がある。以上のような問題が残されているが、本研究は諦観傾向という概念を測定するための重要な基礎研究として位置づけることができるだろう。

### 脚注

- 1) 研究1は、第1著者が2017年度に埼玉学園大学で担当した「社会調査実習Ⅰ」「社会調査実習Ⅱ」の成果に基づいている。当時の受講学生である藤戸唯鈴・安田千穂の両氏には実習成果の再検討・再分析・再構成の許可を得た。両氏の快諾に心より感謝したい。
- 2) 「社会調査実習Ⅰ」「社会調査実習Ⅱ」での検討時には「主観的諦観」の語で定義の作成を行っていた。本研究に成果をまとめ直すにあたり、主観的諦観から諦観傾向への表現の変更を行っている。
- 3) 受講学生が尺度項目の作成の主体となった理由は、授業の一環であったことに加え、拙いながらも学生たち自身で考えた項目・言葉を使用した方が、調査協力者である同年代の学生達にも分かりやすい質問項目となることを期待したためである。ただし、諦観傾向尺度の適用可能年齢は10~20代の若年層に限定されず、ある程度幅広い年代への適用が想定できる。
- 4) 研究2は、第2著者が2018年度に指導した安田千穂氏の卒業論文のデータの再分析・再構成である。データ使用ならびに論文作成に関する安田氏の快諾に心より感謝したい。
- 5) 安田氏の実施した調査では研究1で削除した項目6、12、15が残されていたため、再分析した。その結果、項目12が.14、項目15が.20と研究1と同様に負荷量が低い結果となった。一方、項目6については.54であった。この基準であれば、尺度項目に加えることも可能である。しかし研究1では負荷量が低く尺度項目から除外されたこと、及び研究2においては、この第6項目を削除した場合でも、 $\alpha$ 係数が.89のまま変化がないため、研究1に引き続き、削除することとした。

引用文献

浅野 憲一・小玉 正博 (2007). わりきり志向尺度作成の試み 日本健康心理学会第20回大会発表論文集、76.

浅野 憲一・小玉 正博 (2008). わりきり志向が目標への関与に及ぼす影響 日本心理学会第72回大会発表論文集、1017.

藤井 義久 (1998). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究、68、441-448.

藤川 大祐 (2014). 「さとり世代」に対する戦略的道德教育の検討 授業実践開発研究、7、1-6.

速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）、51、1-8.

金政 祐司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証：親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から 対人社会心理学研究、2、93-101.

児玉 夏枝 (2016). 青年期における自己の葛藤と家族機能との関連についての研究：対人恐怖の傾向・自己愛的傾向に着目して 京都大学大学院教育学研究科紀要、62、387-399.

内閣府（編）(2014). 平成26年版 子ども・若者白書 日経印刷（PDF版[http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf_index.html)）.

2019年9月現在)

Schmitt, D.P. & Allik, J. (2005). Simultaneous administration of the Rosenberg Self-Esteem Scale in 53 Nations: Exploring the universal and culture specific features of global self-esteem. Journal of Personality and Social Psychology, 89, 623-642.

総務省 (2018). 国政選挙における年代別投票率について（平成30年1月11日） [http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo\\_s/news/sonota/nendaibetu/index.html](http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/index.html)

総務省統計局 (2009). 人口推計（平成21年10月1日現在） - 全国：年齢（各歳）、男女別人口・都道府県：年齢（5歳階級）、男女別人口 - 平成22年4月16日公表 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2009np/index.html>

菅沼 慎一郎 (2013). 青年期における「諦める」ことの定義と構造に関する研究 教育心理学研究、61、265-276.

田中 道弘 (2017). 選挙及び政治に関する大学生の意識調査：青年のアイデンティティ研究への新しいアプローチの試み 埼玉学園大学紀要（人間学部篇）、17、295-305.

吉井 健 (2009). 諦観（あきらめ）語彙考 文林（神戸松蔭女子学院大学学術研究会）、43、63-84.

Appendix 1 邦訳版家族機能測定尺度（FACESⅢ；児玉，2016）の凝集性因子の項目内容（測定は「1. 全くない」～「5. いつもある」の5件法）

- 
- 1 私の家族では、困った時、お互いに助け合う
  - 2 私の家族は、お互いの友人を大切にしている
  - 3 私の家族は、みんなで一緒に何かをするのが好きである
  - 4 他人同士よりも、家族同士の方が親しみを感じる
  - 5 私の家では、自由な時間を家族と過ごす
  - 6 家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている
  - 7 何かをする時は、家族みんなでやる
  - 8 私の家族は、みんなで一緒にやりたいことがすぐに思いつく
  - 9 私の家では、何かをきめる時、家族の誰かに相談する
  - 10 私の家族はよくまとまっている
-

諦観傾向尺度作成の試み

Appendix 2 恋愛イメージ尺度（金政, 2002）の項目内容  
（測定は「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法）

- 
- 1 恋愛なんて所詮アクセサリーのようなものでしかない
  - 2 恋愛は遊びだと思ふ
  - 3 恋愛は自分の生活の付加価値に過ぎない
  - 4 恋愛は相手を都合よく利用するものである
  - 5 恋愛など一時的に盛り上がるだけのものである
  - 6 恋愛はお金の消費である
  - 7 恋愛は常にしていたいと思ふ
  - 8 恋愛は心の支えだと思ふ
  - 9 恋愛は私を幸せな気分にさせてくれる
  - 10 恋愛をすると自分に自信が持てるようになると思ふ
  - 11 恋愛をしていると生活に張り合いが出る
  - 12 恋愛は生きていくために必要なものだと思ふ

注：項目1～6は「利那的・付加価値」因子、項目7～12は「大切・必要」因子の項目となる。

Appendix 3 大学生生活不安尺度（藤井, 1998）の日常生活不安因子の項目内容  
（測定は「2. はい」「1. いいえ」の2件法）

- 
- 1 大学で人が自分のことをどう思っているのか気になる
  - 2 必要な単位をすべて取得して、卒業できるか不安になる
  - 3 留年したらどうしようと心配になる
  - 4 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になる
  - 5 友だちと一緒に何かをしなければならぬ時、上手く協力できるか不安である
  - 6 サークルで先輩たちとうまく付き合えるか不安である
  - 7 1限目の授業にきちんと起きて出席できるか不安である
  - 8 何らかの団体に、突然勧誘されないか不安である
  - 9 先生が近くにいると気になって仕方がない
  - 10 一か月の生活費が足りるかどうか心配である
  - 11 授業中、先生の言っている内容が分からなくて不安になる
  - 12 大学の先生と話をするとき緊張する
  - 13 先生の研究室に呼び出されたら、何を言われるのかと心配になる
  - 14 将来、良い会社に就職できるか不安になる
-